

犬山学



第1回『犬山歴史文化ぷらっとフォーム』・記念講演
第13回・第14回・第15回犬山学サロン
犬山学研究センター特別展
犬山市民総合大学敬道館 グローカル学部
市民向け出前講座



特別展『よみがえる蓮池古墳群』会場の様子〈写真：中野耕司〉

第1回『犬山歴史文化ぷらっとフォーム』

開催日時: 2023年11月11日(土)

場所: 名古屋経済大学 71B講義室

2023年7月に、犬山市が文化庁から認定を受けた「犬山市文化財保存活用地域計画」では、歴史文化資源の保存・活用の推進体制として「犬山歴史文化ぷらっとフォーム」を設立し、その運営を犬山市と名古屋経済大学犬山学研究センターが協働で担うことになりました。

11月11日(土) 本学において開催した「第1回犬山歴史文化ぷらっとフォーム」には、文化資源の所有者や研究機関、保存・活用団体など22団体39名の皆さんが参加されました。

記念講演では小林真理 東京大学大学院教授に文化財保護行政について、文化財の保存と活用という一見相反する目的をいかに共存させるのか、を様々な事例からお話いただきました。(次頁参照)

併せて、犬山市から「犬山市文化財保存活用地域計画」について(図1)、本学犬山学研究センターから「犬山歴史文化ぷらっとフォーム」への大学が関わる意味について説明をしました。

ご参加いただいた各団体の皆様からは「細かい

テーマでくくるのではなく、連携やストーリーを持って文化財や人をつなげて考えなければ進まない」「地理的に広域的な視点を持ち、歴史学だけでなく地質学や地形学、生態学といった自然科学の分野を関連付けたら、今より深いアピールができるのではないか」「企業が関わる文化財もあるので、彼らの力も活かせないか」などのご意見をいただきました。

今後も市民団体の皆さんと一緒に、犬山市の文化財のより良い保存及び活用を進めていきます。



犬山市文化財保存活用地域計画の認定でどう変わるの？

今までは…

主に指定・選定・登録文化財が中心。
それぞれの団体で個別に保存・活用してきました。



犬山歴史文化ぷらっとフォーム

これからは…

地域社会全体で、文化財と文化財を取り巻く
周辺環境や人々の活動をまとめて「歴史文化資源」
として総合的に保存・活用していきます。

記念講演 「文化財保護と文化財保護行政」

2018年、文化財保護法が改正された。文化財保護法は1950年に制定されたときから、一貫して「保存と活用」を掲げてきたところであるが、近年は「活用」に重点を移したともいわれている。しかしながら、そうであろうか。そもそも国の制度を新たに作り直して文化財を保護していくということは、国民（地域においては住民）の理解が得られていないとできない話である。文化財保護法が、制定当初から、「保存と活用」を含意していたことは、新しい民主国家を建設するために船出した戦後の文化財行政において、とりわけ重要な意味をもっていたように思えるのである。

文化財保存の専門家に言わせれば保存と活用は矛盾すると言う。まさにその通りであり、かつて優れた有形の文化財が発掘しても、適切に保存が継続できないまま、本来の文化財の状況が劣化していくという経験から、保存科学の研究分野が進展してきた。保存を第一義と考えるのであれば、活用はもってのほかということになる。指定のための学術的価値の同定を含め、保存・保護の領域は極めて専門性の高い領域であり、その専門性ゆえに、文化財が伝えられてきた歴史があるといってもよい。そのように進められてきたのが文化財保護であり、文化財保護「行政」はその専門性を確保し、その判断に任せて

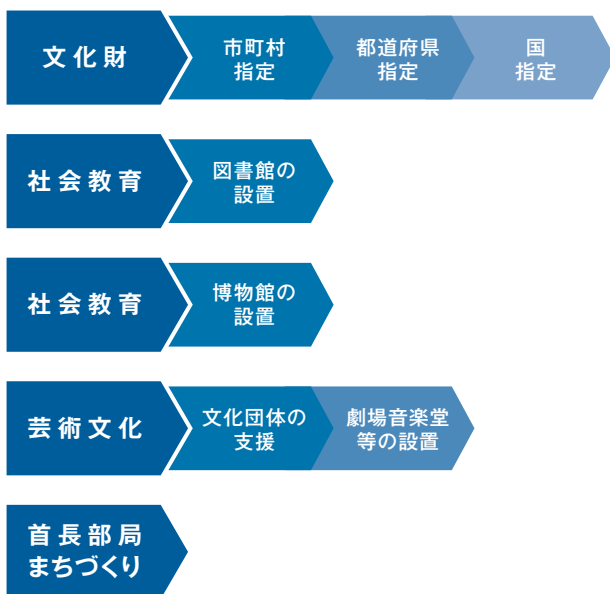
おく領域と考えられていた。とはいえ、専門性の高い領域は、一般性や住民の目線を排除することにもなりかねない。そのことは結果として文化財保護「行政」への住民の関心を失わせかねない。

かつて、重要文化財級の文化財を多数保有するある県の知事がぼやいていたことがあった。そのぼやきは、県議会において文化財保護のための予算を十分に確保できないことに対するぼやきだった。国の指定重要文化財の修復の費用を補助するにしても、たとえば屋根瓦の修復などは県民に確認をしてもらうことはできない。見えないと必要とされていることもわからない。ただ、専門家やその県は粛々と文化財を保護してきているのである。また文化財は行政のものではない。文化財によって構成される物語は行政区域を越えることも当然あるだろう。

文化財に限らず文化は失われてはじめてその重要性がわかるという意味においては、安全な空気や水といったインフラと同じである。専門家はつねにその重要性と喪失への警告を発しているだろう。でも専門家だけでは文化財は守り、継承していくことはできない。計画は、文化財保護「行政」に見える化し、行政として何をし、様々なアクターと協力しないとできないことをするために策定するものである。

これまでのイメージ

(単線的、でも目標が?)



これからのイメージ

(総合的、連携)



講師プロフィール

東京大学大学院人文社会系研究科 教授
小林 真理

文化政策・文化行政・文化経営で、文化・芸術の発展を支える制度や、文化政策を執行していく機関およびアクターとしての行政・芸術機関・「市民」について研究。
文化経済学会・理事、日本文化政策学会・副会長

第13回犬山学サロン 「御三家付家老成瀬家と徳川將軍家」

開催日時:2023年5月23日(火)16:40~18:00

場所:名古屋経済大学 71B講義室

元和2年(1616)4月17日、徳川家康は75歳で生涯を閉じた。それ以前に死期を悟っていた家康は、將軍秀忠に後事を託すとともに、側近の成瀬正成と安藤直次に遺命を下した。その遺命とは、「義直・頼宣が將軍秀忠に謀反の心を抱かせないようにせよ。もし、そのようなことがあったら、正成・直次を草葉の陰から叱り咎める」というものであった。

家康は関ヶ原の戦い後に誕生した九男義直(尾張家)・十男頼宣(紀伊家)・十一男頼房(水戸家)の支えとして、最も信頼できる家臣を補佐役に命じ、これらは御三家付家老と称された。なかでも成瀬正成は駿府年寄として家康の全国統治政策を遂行しながら(表1)、尾張家初代当主義直の付家老として尾張執政を務めた。家康の死後も義直は、付家老成瀬正成・竹腰正信(義直の異父兄)をはじめ、家老たちの意見をふまえて藩政を行った。付家老成瀬家・竹腰家は「両家年寄」とも称され、藩政の最高職として幕末まで代々継承された。嫡男光友(のち二代当主)に対して義直は付家老の意見を聞き入れることは権現様(家康)の遺命であると説諭している。

表1

職		府
大御所	徳川家康	家康の下にとどまる 駿府年寄兼任 義直の異父兄
藩主	徳川義直	
傳役	成瀬正成	
後見役	竹腰正信	
尾張		
藩政代行	平岩親吉	
(家老)	佐枝種長	平岩家重臣
(家老)	鈴木重吉	平岩家重臣
犬山城代	平岩吉範 平岩宮内少輔	親吉の甥 親吉の甥
国奉行	興津文右衛門 原田右衛門 寺西昌吉 藤田忠次	松平忠吉旧臣、清洲三奉行 忠吉旧臣、清洲三奉行 忠吉旧臣、清洲三奉行 忠吉旧臣、興津の死後就任
清洲町奉行	松井勘兵衛 青山作兵衛	忠吉旧臣 親吉家臣
名古屋町奉行	舎人源太左衛門 松井勘兵衛 相原内匠	忠吉旧臣 忠吉旧臣 親吉家臣、添役

曾を幕府に返上するように申し渡された。これに対して付家老成瀬正親の嫡男正幸は、公儀御用の地として家康から拝領した由緒があるので、返上は筋違いだとしてこれを拒絶した。また、七代当主宗春の隠居謹慎にともなう家督相続において、幕府は他家からの養子相続を画策するが、「源戴公(宗勝)を指置き奉り、公義より御相続のいへれなし」と、尾張家の血統を重視していた付家老成瀬正泰は反対し、分家

高須松平家の宗勝の相続を主張して、これを実現した。

表2

格	職	家	石高	叙位任官	將軍への御目見			
					参府 御暇	参勤 御供	帰国 御礼	家督 相続
万石以上	両家年寄	成瀬家	3万5000石	従五位下諸大夫	●	●	●	●
		竹腰家	3万石	従五位下諸大夫	●	●	●	●
	万石以上年寄	渡辺家	1万石余	従五位下諸大夫	●	●	●	○
		石河家	1万石余	従五位下諸大夫	○	●	●	○
		志水家	1万石余	従五位下諸大夫	○	●	○	○
諸大夫	諸大夫年寄	藩主側近層	万石以下	従五位下諸大夫	×	○	×	×
老中列以上	年寄	藩主側近層	万石以下	なし	×	●	×	×

※●は寛永期にはすでに將軍への御礼が行われていたことを示し、○はそれ以降から御礼が許可されたことを示す。

帰国御礼は藩主の使者として將軍に拝謁した際に「自分之御礼」が許可されたか、否かを示す。

成瀬家は付家老として「権現様上意も有之家」と位置づけられ、尾張家の家老(年寄)衆のなかでも特別の格式を有していた。尾張藩主が在国の時は將軍家への年頭御礼や八朔・五節句など年中行事の名代を勤めた。また、自家の家督相続御礼や参府・御暇御礼での將軍への拝謁が許可されるなど大名並みの待遇を受けた(表2)。しかし文政期(19世紀)以降、付家老の大名化志向が高まると尾張家の養子相続問題と相俟って、付家老と家臣団との対立が顕在化した。こうしたなかで天保14年(1843)11月、十二代当主斉荘は犬山御成を実施した。約100年ぶりの犬山御成は付家老との関係修復の一手段となり、付家老成瀬家は引き続き幕藩関係および領内統治の安定化に尽力していくことになったのである。



講師プロフィール

中京大学文学部 教授・徳川林政史研究所 特任研究員
白根 孝胤

幕藩体制の構造について、徳川將軍家と大名家との関係(幕藩関係)に着目した分析とともに、尾張藩政史の展開について研究を行っている。また、諸大名の屋敷・庭園における饗応・交流の実態や尾張徳川家十四代当主徳川慶勝が撮影した幕末・明治期の写真の分析など、文化史・生活史の側面からも研究に取り組んでいる。

第14回犬山学サロン 「化石から探る1600万年前の深海魚の世界」

開催日時:2023年10月5日(木) 16:40~18:00

場所:名古屋経済大学 71B講義室

犬山市は、木曽川沿いなどにジュラ紀の地層が、善師野付近に新生代の地層があり、地層や化石を学ぶにはとてもよい場所である。今回紹介する1600万年前という時代は善師野の地層ができた頃より少し新しい時代で、過去2000万年間でもっとも暖かった時期としてよく知られている。この時代の地層は犬山市には残っていないが、岐阜県の瑞浪市や土岐市には深海でできた地層が見られる。当時の犬山市にも深い海が広がっていた（が、その後地層は侵食されてなくなってしまった）かもしれない。

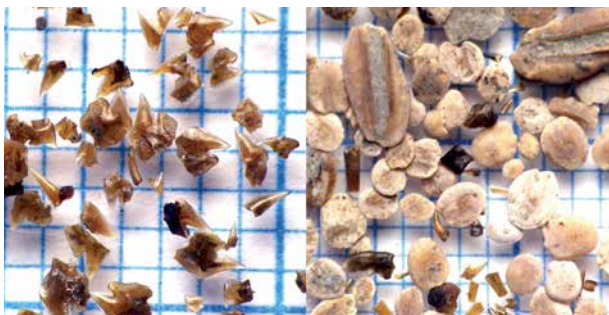
昨年度まで私は研究室の大学院生とともに1600万年前の深海魚化石の研究をしてきた。深海魚化石と聞くと、たいいてい人は「お頭付きの化石」（体全体が残った化石）を頭に思い浮かべるだろう。しかし、私の研究室ではサメ・エイ類の歯化石や耳石（硬骨魚の頭にある小さな炭酸カルシウムの粒）化石といった魚のパーツの化石を研究対象としていた。研究する上では「お頭付き化石」の方が望ましいが、それらは産出がとてもまれで、標本を集めるだけでもとても苦労する。一方、パーツ化石は多くの地層に普通に含まれていて、ほんの数mmという大きさながら種類を知ることができる。岩石を採集し、その中から化石を取り出すまでには多くの体力と時間を要するが、知りたい場所の知りたい時代にどんな深海魚がいたかを解明するためには、パーツ化石の方が適している。

私は学生とともに三重県、富山県、岡山県などに出かけて多くの岩石を持ち帰り、それらから数千個の小さな歯や耳石化石を取り出した。これまでに約30種の深海性サメ・エイ類、50種以上の深海性硬骨魚が見つかった。このようなやりかたで研究をしている所が国内にほとんどないこともあり、見つかった深海魚化石には国内で初めてのものも珍しくない。中には世界で初めて、つまり新種の化石もあった。

化石の多くは現在の日本近海に生息する深海魚の歯や耳石によく似ているが、まったく同じというのは全体の2割程度で、その他はすべて絶滅した種類のものだった。1600万年という時間は、深海魚において種が絶滅したり新たに生まれたりして全体の顔ぶれが変わるには十分な時間だったと言えるだろう。現在の太平洋と日本海とでは深海魚の組成は大きく異なるが、1600万年前ではそのような地域差はほとんどない。当時の日本列島の形と周辺の海流の流れ方のせいで、現在のように海域で深海魚の顔ぶれに大きな違いが生じるということがなかったと考えられる。



深海魚化石を産する地層(富山県)



深海サメの歯(左)と深海魚の耳石(右)の化石(岡山県)



講師プロフィール

理学博士
氏原 温

子供の頃より化石に興味があり、趣味で化石採集を行う。翼足類（浮遊生活をする巻貝、クリオネの仲間）化石を研究。50代を過ぎて深海魚化石の研究を始め、名古屋大学を定年退職後も自宅で研究を行っている。

第15回犬山学サロン 「蓮池古墳群 ～古墳の終わりと火葬の始まり～」

開催日時:2023年11月7日(火)16:40～18:00

場所:名古屋経済大学図書館

蓮池古墳群は、名古屋経済大学東約500mに位置する。本学西には刀塚古墳が、南には西山古墳群があったとされるので、実は古墳に囲まれた大学でもある。ただし、すべて消滅したこととなっており、実態が不明なのは残念である。



蓮池古墳群と周辺の古墳(作図:赤塚次郎)

蓮池古墳(2号墳)は、1951年山林開墾中に発見され、南山大学中山英司氏が1日だけの調査を行っている。古墳時代後期(7世紀代)造営の、横穴式石室を埋葬施設とする小さな古墳ではあったが、火葬骨を収めた石櫃が出土したことで注目された。火葬は仏教伝来以後の葬法であり、700年の僧道昭が最初とされるが、703年に持統天皇も茶毘に付されたことで一気に官人・僧侶に流行した。発見された火葬骨と石櫃は、同時に見つかった須恵器と土師器の年代観から8世紀代に横穴式石室内へ追葬されたものと推定された。中央からさほど時間を経ずに、火葬の流行がこの犬山にも伝わっていたのである。

この蓮池古墳の石櫃例を含めて、犬山から春日井にかけては8世紀代の火葬骨を納めた石室や蔵骨器が5例知られ、県下でも集中して発見されている。その分布の要には大山廃寺(小牧市大山)が位置しており、この地方の火葬普及に大に関係するのではないかと考えている。

火葬骨を納めた石櫃は、犬山市善師野～可児市や瑞浪市に露頭のある瑞浪層群中村層の堆積岩(砂質凝灰岩や凝灰岩質砂岩と呼ばれる)で作られている。同石材では6世紀中ごろから「家形石棺」が作られ、

大垣市や名古屋市まで運ばれて使われたことが分かっている。当地方の家形石棺はその大きさから大中小に分けられるが、おおよそ年代とともに小型化していく。7世紀以降の小型化した石棺には、大人の遺骸を納めることは困難であり、さらには複数体の人骨が納められた例もあることから、骨化した遺骸を納骨(再葬)する容器と化していたと考えている。



石櫃と火葬骨(南山大学人類学博物館所蔵)〈写真:中野耕司〉

蓮池古墳の埋葬施設「横穴式石室」は、遺骸を追葬できることに最大の特徴がある。多いものでは一つの石室内に十数体が納置された例もある。長きにわたって追葬が行われたことにより、先行の骨化した遺骸を石室内で移動したり納め直したりする行為(再葬)が派生する。その普遍化が、遺骸を燃して一瞬に骨化する新たな葬送行為(火葬)をも、すんなりと受け入れることのできた背景と考える。

蓮池古墳群は、現在すべて滅失したとされているが、近年の踏査で新規の古墳も確認でき、完全に消滅した古墳群ではない。昨年、本学図書館において開催された、蓮池古墳群出土遺物の里帰り展が、再び本学周辺の古墳にスポットを当てるきっかけにもなれば幸いに思う。



講師プロフィール

NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
副理事長・犬山学研究センター客員研究員
服部 哲也

1985年より名古屋市教育委員会に学芸員として勤務。埋蔵文化財にかかわる発掘調査に多数従事する。2010年よりNPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワークの副理事長として、文化財をまちづくりに生かす活動を実践中。

犬山学研究センター特別展 「よみがえる蓮池古墳群 ～失われた犬山市内最後の群集墳の謎に迫る～」

開催期間：2023年10月2日（月）～11月30日（木） 場所：名古屋経済大学図書館

名古屋経済大学から見て東側の本宮山南麓の丘陵上には、かつて「蓮池古墳群」と呼ばれる古墳群がありました。今回、最新の研究成果を踏まえて、農地開発で消失した蓮池古墳群（一部残存）の全体像を示すとともに、古墳時代終焉期から律令国家形成期にかけての尾北の地域社会について感じていただけるよう、南山大学人類学博物館（石製家形蔵骨器、須恵器および陶片を保管）と犬山市（須恵器2点を保管）の協力のもと、古墳群からの出土遺物の里帰り展示を実施しました。



出土遺物（須恵器平瓶）犬山市所蔵（写真：中野耕司）

蓮池古墳群は、1951年に南山大学考古学研究室によって発掘調査され、古墳時代後期に造営された20基ほどの古墳群でした。古墳時代終焉期の7世紀後半に造営され、地域の有力者が埋葬されたと考えられています。このうち、蓮池2号墳の横穴式石室からは火葬された遺骨が納められた石製家形蔵骨器が発掘されています。このような石製蔵骨器は全国的にも類例が少なく、近隣では唯一の事例であり、学術的にも大変貴重な資料です。

また、企画協力をしていただいた特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク（ニワ里ねっと）の調査結果から作られた分布図や周辺地図からは、大学の周辺には2つの古墳群を始めとする多くの古墳が存在していたことが分かり、古代よりこの地域には大きな地域社会が形成されていたと思われます。



出土遺物（須恵器長頸瓶）
南山大学人類学博物館所蔵（写真：中野耕司）

特別展に並行して、ニワ里ねっとによる資料調査も行われました。石製家形蔵骨器の制作年代と近隣の遺跡から発掘されている遺物から火葬の風習が早くから受入られていた地域と思われ、律令制への移行段階の地域社会を考える上でも非常に重要な資料として位置づけられる、などの新たな報告を受けました。

特別展の期間中には、ニワ里ねっと 副理事長の服部 哲也氏による「犬山学サロン（前頁参照）」を実施し、最新の調査結果や他の遺跡との比較、当時の埋葬文化について、また犬山市内で古代の様子が見て取れる場所など興味深いお話をしていただきました。

ご来場いただいた皆様から「古墳群の存在を初めて知った」「もっと地元の歴史について知りたくなった」などのお声をいただきました。今後も近隣地域に関する特別展を実施する予定ですので、ぜひお越しください。



犬山市民総合大学敬道館 グローカル学部

開催日時:2023年10月14日(土)10:00~11:30 場所:名古屋経済大学 14A講義室

本学の教育方針「広い視野を持ち世界と共存しながら、地域に根差した視点を持つ」から名付けられたグローバル学部で、犬山学研究センター長の中村真咲教授が、名鉄小牧線沿線の史跡を紹介した『名鉄小牧線 歴てつマップ』について講座を実施し、49名の皆さんにご参加いただきました。

『歴てつマップ』は昨年度、名鉄小牧線開業90周年に合わせて、公益財団法人シキシマ学術・文化振興財団の助成を受け、犬山学研究センターと特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワークと協力して発行したものです。

この地域は、古墳や寺社仏閣と廃寺跡、城跡ばかりでなく窯業や製鉄の痕跡など、多くの歴史遺産が眠るミステリアスな路線です。古代から近代にかけて繰り広げられたであろう人々の営みを、路線をたどってお話しました。

「知らない地元の歴史を知れた」「街を歩くときに気を付けてみようと思った」など、再発見をしてくださった方や、古い路線や街道の表記に気付いて下さる方もいて、お楽しみいただけたようです。

当日は、犬山市による「お試し配信」も実施。ネット上でも多くの方にご参加いただきました。



市民向け出前講座

今年度も多くのご依頼をいただき、市民向けの出前講座を実施しました。

大府市と小牧市では、大河ドラマ「どうする家康」に合わせて、経営学部の四辻秀紀特別教授が、徳川家康から尾張徳川家が引き継いだ『駿府御分物』から、その人柄や当時の文化をお話しました。

また、春日井市の「春日井環境アカデミー」では、犬山学研究センターの高橋裕平客員教授が、地球の

成り立ちから46億年にわたる環境の変化を踏まえて、環境問題にどう対峙していくのかをお話しました。

市民向け出前講座のテーマ一覧をホームページにて公開しておりますので、ご覧ください。 ▼

